―注意―

　こちらの小説は、総集編のために書き下ろした特別編です。
　本編『暴虐地獄に堕つ』の後日譚となっているため、本編読了後にお読み頂くことをお勧め致します。

目次

１．終わりの始まり　4P
２．戦士が愛玩動物（ペット）に堕ちるまで　24P
３．出荷までの下準備　44P

1．終わりの始まり

果てしなく広がる、広大なる宇宙。
未知と既知とがマーブル状に混じり合う漆黒の大海原を、一隻の船がゆったりとした速度で進む。
それは、『商船』を自称するにはあまりにも巨大で、あまりにも大げさで、そしてあまりにも堅牢であった。
組織の名は、『ジベインカンパニー』。
宇宙にはびこる侵略者達をメインターゲットに据えて商いを行う、宇宙の商人ギルドである。
全長1キロメートル、高さ250メートルの超大型宇宙船を社屋とし、全宇宙を飛び回りながら侵略兵器や凶悪な怪獣、傭兵宇宙人を斡旋し巨額の富を築き上げていた。
辣腕で知られるカリスマ女性社長・ジベイン星人ジェルシーを筆頭に、怪獣製造と兵器開発のスペシャリスト・オクタン星人ニドル、そして同業者からも恐れられる〝トラブルシューター〟・ヴァイシ星人ミドネシアが脇を固めるこの組織は、同業他社と比較しても頭一つ……否、二つは抜きん出ている。
このギルドが稼ぎ出す利益は他のギルドの追随を許さず、営業収益は年々右肩上がり。技術力の高さや営業力から、その秘密を探ろうとする同業者も数知れない。
そんな彼らにとって、そして〝お客様〟でもある侵略者にとって、悩みの種として挙げられているのが、宇宙平和維持組織である『銀河警備隊』だ。

パレリス星人が結成したこの警備組織は、彼らだけが持つ特異的な力によって、これまでに沢山の命を救い、同じく沢山の侵略者や怪獣を倒してきた。
銀河警備隊は、侵略者にとっては勿論のこと、商人ギルドにとっても厄介な存在である。
我が物顔で宇宙を航海する『ジベインカンパニー』とて、例外ではない。大がかりな取引やオークションを潰されたことも、一度や二度ではない。
商人ギルドにとって大口の取引を潰されることは、即ちギルドとしての沽券にも関わる。
今後の利益を確保するためにも、パレリス星人は可及的速やかに対策しなければならない問題であると同時に、手をこまねいている同業者を出し抜くチャンスでもあった。
独自のネットワークを駆使した末、彼らは地球守護を任命されている女性隊員・ティアナに目を付けた。
パレリス星から派遣された彼女は、怪獣災害が続く地球にとっての最終防衛ライン。
地球では怪獣災害から計り知れない数の人命を救ってきた功績に加え、その愛らしいルックスより、地球人からは『セイントガール』とも呼ばれ、親しまれている。
普段は光希（ひかりのぞみ）という少女の姿で生活しているが、怪獣が現れた際には本来の姿に戻り、最大身長39メートルにまで巨大化。自分よりも遙かに大柄で屈強な怪獣が相手であっても、果敢に立ち向かう勇気と精神力を持ち合わせている。
パレリス星人の最大の特徴とも呼べる、純白の肌。その上を走る深紅のラインが、全身に美しい彩りを添える。
桜色のショートヘアは、春のせせらぎの如く。滑らかで艶に満ちており、その下で輝く桃色の瞳は、まるで宝石のようだ。

体格はやや小柄ながらもスタイルは抜群で、すらりと細く長い手足や両胸の膨らみ、そして張りのあるヒップは、否応が成しに人々の目を釘付けにする。
アイドルにも引けを取らない整った顔立ちに加え、局部にボディペイントを施したかのような出で立ちから、彼女に対して密かな劣情を抱く地球人も、決して少なくはない。
表情には若さ故のあどけなさも残るが、しかし数多くの死線をくぐり抜けたその実力は、確かなものであった。
彼女の戦闘を根底で支えるのは、数多の怪獣を塵に還した破壊光線『セイント・ドラグーン』や、あらゆる物体を両断する『シャイニング・スライサー』など、二十を超える種類の光線技と、極限まで鍛え上げ、磨き上げたことで実現が可能となった素早い身のこなしである。
敵の弱点を的確に打ち据える鮮やかな打撃技に、体内を流れるエネルギーを収束することで放つ光線技を用いて、侵略者との戦闘を有利に進めていく。
一方で、ティアナにとって地球は、生命維持にも必要な『光』があまりにも足りない、過酷な環境と言えた。
巨大化をするにあたっても大量の光エネルギーを必要とするほか、攻撃や防御、ダメージからの回復、更には巨大化の維持にさえも、エネルギーを湯水の如く消費する。
雲一つ無い真夏の晴天時であっても、太陽光からのエネルギー補充量が、彼女自身のエネルギー消費量を上回ることはない。
彼女にとって光エネルギーは酸素のようなものであり、消耗することによって五感が鈍り、耐え難い倦怠感や頭痛、吐き気などに襲われる。

エネルギーが枯渇すると立ち上がることさえも困難となり、体内のエネルギーがゼロになった瞬間……ティアナは、仮死状態に陥ってしまう。
即ち、ティアナが地球で戦う事は、それそのものが非常なるハンデを背負っていることに他ならないのである。
また、彼女はその華奢な見た目通りに非力であり、怪獣が往々にして持つ規格外のパワーに曝されてしまえば、それだけでピンチに陥ってしまうことも決して珍しくはない。
屈強な巨躯を誇りながらも狡猾な怪獣達は、ティアナのそんな弱点を本能的に察知し、持ち前の怪力を前面に押し出して攻めてくることが多い。
時には上半身を強く抱きしめられ、時には細い首を絞め上げられ、時には巨大な身体に押し倒され、時には薄い腰や腹を踏み潰され。
極太の腕による殴打や、筋肉質な脚から繰り出される蹴り、更にはムチの如く長い尻尾による打擲（ちょうちゃく）。そのような激しい暴力に見舞われれば、ティアナの矮躯は風に吹かれた木の葉のように舞い、倒れ伏す。
血を吐きながら。全身を痣や打撲痕で染めながら。赤土や泥に塗れながら。
ボロボロに傷付いた身体を、引きずるようにして。
それでも彼女は、立ち上がる。
全ては、地球の……大切な星の、大切な命を、守り抜くために。
たとえどれだけ強大で、勝ちの目を感じられない敵が現れたとしても。
その背中に守るべき命がある限り、ティアナは決して、彼らを見捨てることはない。
使命と決意を胸に抱き、果敢に立ち向かうのだ。

『ジベインカンパニー』は、そんな儚くも健気なヒロインに注目。
銀河警備隊に所属する、若く見目麗しい女戦士。彼女の存在は、良い〝広告塔〟になってくれそうだ。
善は急げ。早速、彼らは行動に出た。
ギルドでも肝いりの『新商品』ゴールドアドラスのプロトタイプを地球に投入。
身長50メートル、体重6万トン。〝自立型惑星侵略兵器（オートマチックデストロイヤー）〟の異名を持つ、無人型の巨大兵器である。
特殊合金製のアーマーは、挑みかかったティアナのあらゆる打撃は勿論のこと、光線技をも無効化。
光線弾『ブライト・ショット』を弾き、切断光線『シャイニング・スライサー』の刃を砕き、更にはティアナが誇る最大の必殺光線『セイント・ドラグーン』の直撃を受けても微動だにしない、まさしく鉄壁の防御力を有していた。
ゴールドアドラスの恐るべきは防御だけに留まらない。攻撃面においても、セイントガールを圧倒する。
高駆動エンジンの出力によって実現する、怪力自慢の怪獣をも圧倒するパワーで、ティアナの肉体を徹底的に蹂躙した。
巨大な拳で腹部を穿ち、強烈な握力で首を絞め上げ、超高圧電流を全身に流し込んだ。
肋骨をへし折り、頸椎を潰し、内臓を焦がした。
勝利は目前。後はこの身体を連れ帰り、パレリス星人の秘密を探るだけとなったのだが……。

ここで、誰もが予想し得なかった事が起こった。
ゴールドアドラスが、放電攻撃によって自身の回路をショートさせてしまったのだ。
その原因は、満身創痍のティアナが決死の思いで放ったパンチ『ブリッツ・フィスト』。
彼女が見舞ったその一撃は、機械巨人の頭部を僅かだが破壊し、内部の電子回路や機械を露出させていた。
超合金で出来たアーマーで保護された内部には、静電気が触れただけでも大きな影響を及ぼす程の、超精密なコンピューターが幾つも搭載されている。
ゴールドアドラスがティアナに向けて放った殺人電撃は、数千万ボルトは下らない威力だ。そんな高圧の電流が、コンピューターに直撃すれば。
たちどころにエラーを引き起こし、やがては自壊する。
かくして、ティアナは侵略兵器・ゴールドアドラスの侵攻を辛くも食い止め、撃破することに成功した。
だがその一方で――彼女が払った代償は、極めて大きなものでもあった。
暴虐人形が繰り広げた、惨劇の果て。
肋骨がへし折れ、内蔵は焼け焦げ、全身に余すところなく彩られたるは、重度の電気火傷。
美しくしなやかな右腕は、指先から肘にかけて『ブリッツ・フィスト』を敢行した打ち返しによってズタズタに破壊され、見るも無惨な姿に変わり果てていた。
5万トンの馬力で放たれる豪腕。ゴールドアドラスのパンチをまともに受けた頬は、骨までもが砕かれ、痛々しい青黒色に腫れ上がっている。

細い頚部に痣となって残る絞め痕。気道はおろか、頸椎までもが潰される程の圧に曝された首は、唾を飲み込むことさえままならない。
侵略兵器を相手取った激戦を制したティアナは、簡潔に表現すれば『ボロボロ』に傷付いた。
そして、『ボロボロ』になったのは、何も身体だけではない。
むしろその内面……心にこそ、深い深い傷を負った。
〝死〟という結末に至るまでの道筋を、何度も何度も叩き付けられた。
気を失っては引き起こされる様相は、まさしく水責め拷問。溺死寸前まで顔を水中に沈めさせられ、意識を失う間際にのみ息継ぎを許される。そしてまた、沈められる。
繰り返されたら、どうなるか。
心は折れ、抗う気持ちは削がれていく。
星を護る。使命感と勇気を振り絞って立ち上がろうとも、瞬く間に潰される。
どれだけ否定しようとも、『勝てない』と強固に認識させられる。
結果、ティアナは――戦う事に対して強い恐怖心（トラウマ）を植え付けられてしまったのだ。
悪夢にうなされ、発作に苦しみ、時にはフラッシュバックを引き起こし過呼吸までを引き起こすようになってしまった。
『ジベインカンパニー』は、そんな心も体も弱り切った彼女に容赦をすることもなく、更なる刺客を差し向けた。

……続きは本編でお楽しみください。